

=====

GCOE NewsLetter
[No.31 2010/4/27]

gCOE授業科目の開講について
2010年度第1回大学院学生海外派遣事業について
次回のオープンレクチャーについて
HERSETEC第3号の刊行について
gCOE勉強会の要約
第26回オープンレクチャーの要約
gCOEスタッフ海外出張報告

=====

■ gCOE授業科目の開講について

一昨年度に大学院博士後期課程に入学した方からは、課程博士論文を執筆して学位を取得するにあたりグローバルCOEが開講する授業科目から「テキスト布置解釈学原論」と「テキスト布置解釈学各論」を各2単位修得することが必要です。またこれらの授業への登録はグローバルCOEプログラムが推進する二つの事業に応募する際の条件となっています。一昨年度以前に大学院博士後期課程に入学した方についても、グローバルCOE授業科目に登録し履修していることが、グローバルCOE論文賞および大学院学生海外派遣事業に応募する際の条件になっています。

開講科目の詳細についてはgCOEのWebページからご覧ください。

<http://www.gcoe.lit.nagoya-u.ac.jp/education/education02/>

■ 2010年度第1回大学院学生海外派遣事業について

課程博士論文の執筆を最終的な目的として、論文執筆に必要な海外での調査をサポートするのがこの大学院学生海外派遣事業で、年に2回募集しています。受付期間内に計画書を作成して応募してください。

募集人員：若干名

受付期間：2010年4月26日(月)～5月7日(金)16時半必着

募集要領はグローバルCOEのWebページに掲載しています。

<http://www.gcoe.lit.nagoya-u.ac.jp/education/education03/>

■ 次回のオープンレクチャーについて

2010年5月19日（水）18:00～ 名古屋国際センタービル15階
グローバルCOEオフィスにて

講演者：釘貫 亨教授（名古屋大学大学院文学研究科・日本語学）

題目：「近代日本語研究と教養主義の系譜」

■ HERSETEC第3号の刊行について

グローバルCOEプロジェクトの機関紙『HERSETEC』第3号が刊行されました。希望者には文学研究科gCOE事務室で配布します。『HERSETEC』第3号は欧文篇・和文篇の2篇からなり、欧文篇には平成21年度gCOE論文賞受賞の次の論文3編が掲載されています。

・エミリ・ボルドナヴ, “Japonisme, de l'art a la litterature : Pour une presentation des concepts et phenomenes d'influence”

・笠井俊和, “English Smuggling Activities in the Official and Private Documents: The “Spanish Trade” and the Logwood Trade from Jamaica in the Late Seventeenth and Early Eighteenth Centuries”

・山下英夫, “Monstruosite dans Madame Bovary de Gustave Flaubert”

■ gCOE研究会の要約

去る3月3日の13時30分～15時に文学研究科大会議室でgCOE事業推進担当者および研究教育員による事業推進テーマをめぐる研究会が行われ、松澤教授の講演に引き続き、質疑応答が行われました。当日の講演の要約を掲載します。

松澤和宏「テキスト布置の解釈学について」

21世紀COEプログラム「統合テキスト科学の構築」の構想が逢着したコミュニケーションという概念の問題点を取り上げて、テキスト布置の解釈学の素描を試みた。まず最初にヤコブソンの有名な「コミュニケーションの図式」を批判的に考察し、機械論的説明に傾きがち側面を明らかにした。そのうえで、伝統的なテキスト概念を検討し、テキストが社会共同体によって権威を賦与されたものであり、注釈の対象となるものであることに着目し、そこに〈同じもの〉であろうとするがゆえに、引用や解釈や翻訳の対象となることを通じて不可避免的に〈別のもの〉となっていく内在的逆説を指摘した。さらにテキストが注釈の対象となるということ、テキストは（メタ）テキストを生むというように捉え返すことで、テキストの生産性を明

らかにし、この観点からテキストがテキスト産出の結果であると同時に起点ともなることを、テキスト布置として提示した。最後にテキストを生産の時点の文脈と受容の時点の文脈とを背負った二重性として捉えることで、地平の融合（ガダマー）がよりよく理解できることを明らかにした。こうして起源の文脈の復元をもつぱら目指す実証主義的客観性と脱構築的な起源批判がともに一面的なテキスト理解に陥っていることが理解されよう。

■ 第26回オープンレクチャーの要約

日時：2010年4月21日（水）18:00～19:00

名古屋国際センタービル15F GCOEオフィス

講演者：佐藤彰一特任教授（西洋史学）

題目：「哲学的解釈学からテキスト解釈学へー歴史テキストを軸にしてー」

自然科学と人文科学の差異は、前者が一般法則と機械論的な因果関係の探究であるのに対して、後者が現象の個別性を重視し、「意味」を解明する科学であるという点にある。テキスト解釈学は、テキストの「意味」を明らかにすることを学問的課題にしている。報告では、古代ギリシャの哲学的解釈学に始まり、中世の聖書解釈学を経て、近代哲学の解釈学に連なる伝統を念頭におきながらも、カント以後のドイツ・ロマン主義解釈学を代表するF・シュレーゲル、F・アスト、F・シュライエルマッハーらの多様で、対立する解釈学的見解を辿り、現代解釈学の古典であるH・G・ガダマー『真理と方法』を取り上げた。ガダマーの解釈学において、テキスト解釈学にとって枢要な論点は、1) 「理解」の条件としての「先入見」、2) 解釈学的循環、3) 時間的懸隔の解釈学的効用の3点である。これら3点の解釈学的分析面での価値を解説した上で、これら哲学的解釈学の方法論を、歴史学の研究実践面での手法に読み替える試みを、6世紀西欧の代表的な史書である『歴史十書』を例に取って解説することを試みた。続く質疑において、あらゆる（まっとうな）テキストに内在する筈の「真理主張Wahrheitsanspruch」が、理解の可能性の根拠であるとするガダマーの見解をめぐって、活発で有益な意見の交換が行なわれた。

■ グローバルCOE研究教育員ブリーフィング要約

第21回ブリーフィング（2010年3月18日）

金 銀珠「近代日本の文法学成立におけるbe動詞解釈」

本発表では幕末、明治期を経て近代文法学が成立するに至る過程で西洋語のbe動詞が日本の学者にどのように解釈され近代日本の文法学に組み込まれていったの

かについて考察した。近代日本の文法学は、江戸時代の蘭学をはじめとすると近世洋学および伝統的な国学、さらには、近代西洋文法学を資源にして成立しているが、本発表が対象としたのは、江戸後期の蘭学から明治以降、近代日本文法学が成立してくる過渡期の様相に関して歴史的資料を駆使して、その学説史の動態を再現しようとした。

be動詞は日本の文法「学」を作る過程において試行錯誤していく過程が端的に表れている形式である。本発表ではbe動詞が形容詞概念の成立と相まって、山田文法の「統覚作用」（陳述の力）概念を生み、現代の学校文法における連体詞という品詞の成立に一助していく過程を明らかにした。この過程には言語事実を忠実に反映したとは言えない誤解や極端な解釈が介在していた。

■ gCOEスタッフ海外出張報告

高橋 亨（gCOE事業推進担当者・日本文学）
パリにおける日本研究センター（INALCO）での活動
2010年3月21日～29日

今回のもっとも主要な目的は、寺田澄江氏が中心となりINALCOの『源氏物語』研究グループが主催した「『源氏物語』と女性日記」という研究集会に参加することであった。その準備や打ち合わせの後、2010年3月27日に、エコール・ノルマルを会場として、「対論」という形式のシンポジウムが行われた。まず、私が「〈紫式部〉の身と心の文芸」という発表を行い、そのディスカッサントとしてお伽草子研究で知られ『蜻蛉日記』のフランス語訳も刊行しているジャクリーヌ・ピジョー氏が関連の質問と報告をした。次に、カナダのブリティッシュ・コロンビア大学のクリスティーナ・ラフィン氏が「中世日記における『源氏物語』の読み」という発表をし、ディスカッサントはアラン・ロシェ氏であった。いずれも事前に原稿を送り、当日の参加者のためには、発表が日本語であったため、引用の原文と、そのフランス語訳を付した冊子が配布され、そのパワーポイントも用いられた。会場の参加者は50名ほどで、その後に参加者全員を含めた質疑応答が活発に進められた。そこでは寺田氏を含めた二人が通訳しつつ議論を進め、「身と心」をキーワードとして、王朝女性たちの境遇の変化に対応したその相克をエネルギーとしつつ、『源氏物語』の「浮舟」を主として継承した『とはず語り』などを含む女性日記の史的な展開を再検討する視座が明確となった。

この他、25日の午後には日本研究センターで「十二類歌合絵について」という講演を行った。そこではその背景となる「十二類合戦絵巻」のストーリーを説明し、十二支による時刻の組み合わせをふまえて、擬人化された動物の絵と歌、そして名前をめぐるパロディ表現について、寺田澄江氏の通訳を交えた発表を行った。日本研究センターの学生に加えて、教員も含めて30名ほどの親密な集いで楽しかった。

また、事前に貴重本の閲覧を申し込んで、パリ国立図書館では『異国物語』と『住吉本地』の奈良絵本と絵巻、ギメ美術館で『酒呑童子』『酒飯論』の絵巻、そして思いがけず『北野天神縁起絵巻』を見せていただいて新発見があったのも貴重な成果であった。

小川正廣 (gCOE事業推進担当者・西洋古典学)
エンニウスの“tria corda”(三つの心)の解明のための調査

2010年3月14～24日、イタリア中南部で歴史遺跡と文学テキストの関連に関する調査を行なった。アウルス・ゲッリウス『アッティカの夜』17.17によると、南イタリア出身でローマ共和政中期の最大のラテン作家「エンニウスは、ギリシア語とオスク語とラテン語を話せるので、自分は『三つの心』を持っているのだとよく言っていた」と伝えられる。この言葉のポイントは、もちろん、エンニウスの誇った事柄がたんなる異なる三言語の運用能力ではなく、むしろ三言語の運用に内在する三種の文化の同化と併用だということである。今回の調査では、このエンニウスの「三つの心」の意味を歴史的背景との関連で解明するために、イタリアでギリシア語とオスク語が話されていた地域に存在する古代遺跡を訪問した。

今回ギリシア語・オスク語圏で訪れたのは、アナーニ、フェレンティーノ、アラトリ、アルピーノ、アクィーノ、カシーノ、カプア、ベネヴェント、サエピヌム、スコラキウム、カウロニア、ロクリ、レッジョ・ディ・カラブリア、ロザルノ、ヴィーボ・ヴァレンティア、ミノリ、ポンペイ、スタビア、ボスコレアーレの19の遺跡・考古学博物館と土地である。このうちカシーノ、カプア、サエピヌム、カウロニア、ヴィーボ・ヴァレンティア、ポンペイでオスク語の碑文等の具体的史料に接することができた。とくにポンペイでは、出土したオスク語の碑銘はローマ化以前のものが大部分だとはいえ、しかしその一部が西暦79年のヴェスヴィウス山噴火当時まだ公的に活用されていたこと、また噴火時の壁の落書き(*graffiti*)にも、ラテン語とギリシア語に混じってオスク語が用いられたことを確認することができた。つまりポンペイでは、ローマ帝政初期でもオスク語がなお一般に通用していたのである。そして、もちろんポンペイは超例外的に保存状態のよい遺跡であり、その事例はまったく氷山の一角にすぎない。

ポンペイの事例は、「ローマ化」という現象の内実を垣間見させる。それは征服にとともなう被征服民の完全な従属と従来のアイデンティティの喪失を意味するのではなく、ローマ文化と既成の文化との共生・複合による新たな、そしてより「大きな」アイデンティティの創出であろう。愛国的な叙事詩とともにさまざまなラテン劇を創作したエンニウスは、それがローマ化の真相であり、それを「心」に体現する自分こそ真のローマ人だと主張したのではないか。限られた範囲の調査だったが、そこから開き見た展望は大きい。

記事の本文中、フランス語のアクセント記号は省略しました。
次回のメール版NewsLetterの発行は2010年5月中旬を予定しています。

.....
GCOE 「テキスト布置の解釈学的研究と教育」
Hermeneutic Study and Education of Textual Configuration
<http://www.gcoe.lit.nagoya-u.ac.jp/>
.....

NewsLetter No.31

発行：GCOE編集部

編集担当：鎌田隆行

Copyright(C) 2010 NAGOYA UNIVERSITY, GRADUATE SCHOOL OF LETTERS
.....